

現地社会と共に歩む日本人学校運営

— 日系人社会との交流を通して —

前リマ日本人学校 校長

福岡県飯塚市立伊岐須小学校 校長 梶山明彦

キーワード：現地理解，日系人社会，学校運営，交流，コミュニケーション

1. はじめに

マチュピチュやナスカの地上絵などの世界遺産が多い国として知られるペルーは、その歴史においてもインカ文明を筆頭に数多くの古代文明が盛衰し、それらの遺跡が訪れる旅人をロマンへと導いてくれる不思議な魅力を持つ国である。カラフルな民族衣装をまとったインディヘナの姿と、アンデスに奏でられるフォルクローレのどこか郷愁を帯びたメロディのイメージが世界の人々をペルーへと誘っているのだろう。

そんな山岳地帯のイメージが強いペルーだが、実際は大きく3つの地形に分けられ、国土の28%がアンデス山岳地帯（シエラ）、60%がアマゾン川流域の熱帯雨林地帯（セルバ）、そして12%が太平洋沿岸に伸びる海岸砂漠地帯（コスタ）という独特な地域環境や気候が存在する。中南米では、ブラジル、アルゼンチン、メキシコに次ぐ4番目の広さを持つ国であり、日本の国土面積の約3.4倍である。

ペルーの首都リマ市は、海岸地域「コスタ」にあり、市の周囲は小高い山に囲まれている。海は寒流のフンボルト海流であるため、年間を通して肌寒い気候で、短い夏である12月から3月もそれほど暑くはならない。雨は年間を通してほとんど降らないが、人々は遠い山々から降りてくる豊富な水で生活している。

リマはペルーの政治経済の中心地で約800万人の人口を有し、日本をはじめ世界の企業が進出している。ペルー南部に多く見られるインディヘナだが、北部のリマは白人系が多い。近年の経済成長と政治の安定から、中南米の中でも安全な国の部類に入り進出企業も増えてきており、街も整備され、近代的な建物、デパート、巨大なスーパーマーケットなどが立ち並ぶ大都会になっている。

リマ日本人学校は、そんなリマ市の西側の山沿い、周りには国立、私立の大学をはじめ、小中学校、アメリカンスクールやイギリス、ドイツ系の学校等がたくさん集まっている学園地域に在る。

私が赴任2年目の2008年、「学校創立40周年」を迎え、各種記念行事を開催したり、記念書籍を刊行したり、年末には盛大に記念式典を執り行ったりした。

私が在籍した3年間は、ちょうど各種の節目や記念の年に当たり、「日本人ペルー移住110周年」「総領事館開設100年」や、他にも「APEC首脳会議」等も開催されとても多忙であった。

その中でも、中南米でも最も古い歴史を持つ「日本人ペルー移住110周年」は、ペルーに住む日系人の方々にとっての誇りであり、110年の苦勞により勝ち得た現在のペルーにおける日系人の高い地位は、現地で共に生活する在ペルー日本人の誇りでもある。私が在籍した3年間にも日系人や日系人協会、日系人学校等とのたくさんの交流があった。それらの交流をすることにより、日系人の祖国日本への思い、日本文化や言葉を大切に受け継いでいこうとする心情、日本人学校や在留邦人との交流を大切にして現代の日本を知ろうとする努力、これらを感じ取ることができた。また、我々在留日本人も日系人の方々に人情味溢れる昔懐かしい日本人の姿を垣間見ることが出来、その方々に接し、日本人学校の子どもた



日系人協会での移住110周年式典

ちは優しく思いやりのある心を耕せていると思う。

校長として、日系人社会との交流を推進し、それまで以上の関わりを通して、子どもたちのみならず派遣教員やその配偶者も積極的にその社会に入り込み、ささやかながらもご協力させていただいた。また、日系人の方々が日本人学校へもこれまで以上にご支援いただければと思います積極的に関わりを増していった。

3. 日系人社会との関わり

(1) 日系校との交流

日本人ペルー移住以降、ペルー国内には50校ほどの日本人学校が存在したそうだが、第二次大戦を経てほとんどが無くなった。そして現在では4つの日系人学校と1つの日系人幼稚園が存在する。

日系校なので当初は日系人の子息のための学校であることは当然だが、最近では日系校の教育内容や教職員の指導の優秀さから純粋なペルー人も多く学んでおり半数近くがそうである。

リマ日本人学校では、それらの全てと交流をしているが、私が校長として赴任以来、とくにその中でも「ラ・ウニオン校」「サンタベアトリス幼稚園」との交流を推進した。それまでも日本人学校を含めた5小中学校が相互に各校の運動会に招待し合い、リレーや競争遊技、ダンス等を披露する交流が続いていた。ラ・ウニオン校とは「一日学校体験」で招待し合い授業体験学習をしている。子どもたちはお互い日本語やスペイン語を駆使して友達作りをする。私の赴任1年目の時の交流は、お互いの文化の紹介や日常の授業に「お客さん」として参加するというものだった。もちろん全校あげて歓迎し、楽しい思い出と友達を作れる素晴らしい体験の時間だった。

ラ・ウニオン校の校長先生と交流についてビジョンを語り合ったものだったが、意見が一致し今後の交流の仕方を改善していった。リマ日本人学校ではラ・ウニオン校を招待する場合、単なるゲームや日本文化紹介ではセレモニー的な要素が強くなり、せっかく一日という時間を割くのだからもっと中身の濃い「授業」ができないかと教職員が知恵を出し合った。日本文化の紹介のみではない「授業」としての工夫、体を動かす活動を多くする、ラ・ウニオンの子どもたちとの会話が多くなるような工夫、これらを取り入れての授業づくりを行った。

リマ日本人学校では、全学年週に1時間のスペイン語、2時間の英会話を正規授業として行っている。レベル別に4クラスに分けているが、こういった交流学习もあり、小1から中3まで懸命に学んでいる。

6月の招待交流（本校がラ・ウニオン校を招待）で小学部高学年では家庭科でぞうきを縫った。今まで糸と針で縫い物をしたことのないペルーの児童が多く、ペアになった日本の子どもは手取り足取り教えていた。そのためには会話は欠かせないので、スペイン語の能力に違いはあるものの熱心に教えていた。出来上がったぞうきに日本語で名前を書いていた。小学部高学年の理科「天体」の授業では、星座早見盤をパソコンからプリントアウトし切り抜いて使った。南半球の星座なので日本とは違い、日本の子どもたちもペルーの子たちと相談しながら学習していた。派遣教員も南半球の星座にはたいへん興味を持ち、日秘両国で楽しみながらの授業だった。中学部では、日本のどら焼きやイチゴ大福づくりが好評だった。和菓子は日系人関連の店で売っているものの、初めて作る生徒が両国ともにいて興味深く作っていた。

そして、今回の日本人学校での授業交流の目玉は「掃除の時間」。学校で掃除をしたことがないラ・ウニオン校の子どもたちは、まず「自分の手で掃除をする」ことに驚いていたが楽しそうに頑張った。前述の授業で自分達で手作りしたぞうきをバケツの冷たい水につけて絞ることも初めてで、「日本の文化」に触れていた。

リマ日本人学校がこのような「授業の工夫」を見せたからでもあるが、ラ・ウニオン校も独自に色々な工夫をして10月に招待してくれた。本校が訪問するこの日のために先生方が一生懸命考え準備してくれたことが伺え、日本人学校の児童生徒、教員共にとっても嬉しい気持ちになった。

音楽や理科、算数、図工、体育の通常行われている正規の授業を受けることが出来た。そこで工夫が見られたのが、どの子にも日本の子にも均等に活動をさせることだった。音楽では、曲を聴き、先生が演奏するピアノをまね

をして弾いたり、和太鼓の合奏をしたり。ダンスでは、曲のイメージを生徒一人一人が考え体で表現してダンスにした。理科では、ソーラー電池を使った動力車や動物の形のレゴを動かしたりロボットを動かしたり、とても斬新であった。精密機械の国で知られる日本の子どもたちもたいへん興味を持って授業を受けていた。今まで10年近くの両校の交流でマンネリ化が見られはじめていたが、この年の交流の成功により、その後も両校の教員共に「来年はこんなことをしよう」とアイデアが出ていた。

「サンタベアトリス幼稚園」へは、中学部の保育実習で訪問した。この幼稚園は、ラ・ユニオン校の付属にあたり、卒園生の大部分がラ・ユニオン校に進学する。そういった関係でリマ日本人学校の中学部教諭が保育実習の依頼を園長先生にし、快く引き受けていただいた。これも日頃からの交流の賜物だと思われる。日本では、中学生の職場見学や職場体験が行われているが、外国では安全面を考慮して、こういった機会はほとんど出来ない。

スクールバスで訪れ、日本人学校の生徒達が各教室に分散して3歳から5歳の園児たちの世話をした。今まで経験がまったくないし、スペイン語が不得意な生徒たちが多かったが、園の先生方のサポートによって、帰る頃には生徒たちも園児たちも別れを惜しむ様子であった。

このような体験ができるのも日系人社会がそこにあるお陰であり、日本から最も遠い異国の地で、なんと有り難いことであるかと痛感し、児童生徒そして派遣教員もコミュニケーションの大切さを改めて感じた。

(2) 日系人社会とのコミュニケーション

世界各地の日本人学校や補習授業校が在る所には日本人会が在ることが多いが、ペルーは日本人会らしき「三水会」という企業や政府系団体（本校も）の研修の場としての会があるものの日本人会はない。ペルーは前述の通り、移住110年という長い歴史で多くの日系人の方々が暮らしておられ「日系人協会」を組織している。リマの在留邦人は、その日系人協会にお世話になることが多々あり我々も協力をしている。とくに企業の配偶者や教員配偶者は、日系人協会の数々の行事やボランティア活動、サークル活動等に積極的に参加している。また、日本大使館やペルーを訪問される政府関係者も日系人協会との関係を敬意をもって密接にしているようである。APECでリマを訪れた日本政府や皇族の方々も日系人会を必ず訪問している。

本校も前述の日系人学校との交流のみならず、日系人協会の多くの活動に参加や協力をしている。毎年4月下旬に盛大に開催される「日秘UNDOKAI」には数万人の日系人が参加し、各県人会やクラブ、学校等が大行進し、4日間にわたって陸上競技をしたり、柔剣道の模範演技をしたり、日系二、三世くらいのお年寄りたちが素晴らしい姿勢でラジオ体操の演技をしたりと、日本の伝統を受け継ぎながら、日系人全体が一つにまとまり集っている。本校は日系人協会会員ではないが積極的に参加し親睦を図っている。入場行進を観ると、長い苦勞の歴史の中でペルーでの地位を確立し高め、各分野で活躍する日系人の誇りを感じ胸が熱くなるのを覚える。



日秘UNDOKAI

その他、校長として新年会はじめ各種の招待には極力参加するよう心がけ、色々な方々と顔見知りになり、そうすることでその後の学校運営にご協力やご支援いただこうと努力した。日本語弁論大会へは校長として大会の審査委員長となって協力した。日本で暮らしたことがある日系人やペルー人、ペルーで日本語を学んでいる日系人やペルー人など、日本語会話能力にはかなりの差があるが、自分で原稿を書き懸命に話している姿には感銘を覚える。彼らが正しい文法できれいな日本語を話すのを聴いていると、日本の若者たちの「日本語」がとても心配になるほどだ。日系人の方々は、日本の伝統文化を大切に受け継ごうと努力しているし、日本語を忘れまい、話せるようになって一度は日本に行ってみたいとの思いで頑張っている。日

系人会には「お話し会」という日本語で会話をする会があり、本校の教員や教員配偶者も参加して協力している。

上記の活動はこれまでも行われてきたが、私が赴任して各種の会合やパーティ等で日系人会の方々とは知り合いになっていくことによって、頻繁に協力要請がくるようになった。以前は断っていたらしいが、できる限り協力しよう、私も妻も本校教員もそして教員配偶者もすすんで出掛けていった。日系婦人会音楽会では本校の音楽部への出演依頼があり器楽演奏をしたが、その後も毎年出演している。また、子どもたちのみならず教員配偶者もフラメンコやコーラス等の習い事をそこで披露し日系人の皆さんにとっても喜ばれた。音楽部が協力したこともあり、日系老人会からも児童生徒との世代間交流の呼びかけがあり、まずは学校で折り紙をお年寄りと一緒にしたり日本の童謡を子どもたちが歌ったりの時間を過ごした。後日は、子どもたちが日系人会館の老人会にお邪魔し歌や会話を楽しんだ。また、教員配偶者と企業配偶者で活動をしている、裁縫をする「チクチクの会」でも日系人会バザーに作品を出品して運営も手伝っていた。配偶者たちは、日本国大使館や日系人会が行っている孤児院へのボランティア活動にも初めて参加し、ペルーの抱える貧困層の生活実態も見る事が出来た。

本校の運動会や文化祭、入学式、卒業式には、日系人会の方々は毎回バス数台で駆けつけて下さっている。とても有り難いことだ。お祝いのメッセージや花束、ご祝儀と日本をそして日本人学校を大切に思い、お付き合いして下さい。日系人協会主催講演会で招聘した講師（毛利衛元宇宙飛行士等）が本校でも講演できるように手配して下さいました。そしてリマ日本人学校が今日在るのも日系人協会のお陰である。40年前の開校時から23年間もの長きにわたり、日系人会館を借用していたのだ。この御恩は決して忘れてはならない。

リマ日本人学校創立40周年記念式典では本校から感謝状をお渡しした。感謝状だけではとても日頃の恩に報いることは出来ないが、今後も学校、教員、配偶者が協力してその謝意を表していきたいと私は思っていた。ペルー移住110周年式典では、わざわざ本校の児童生徒たちに、常陸宮殿下ご夫妻の歓迎の国旗振りの要請をしていただき、また式典に子どもたちも参加させていただき貴重な経験をした。ペルー政府も日系人社会に敬意を表しており、ペルー外務省主催ペルー移住110周年記念式典や日秘友好100周年記念式典も立て続けに催してくれ、日秘関係の大切さを表していた。

3. おわりに

私の今回の派遣は2回目で、教諭での派遣だった前回とは違い校長としての派遣だった。校長として学校運営のリーダーとしてビジョンを持ち、運営がスムーズに運ぶようにしなければならない。そのためには、学校運営委員会はもちろん、在留日本企業や政府団体、現地に長く住む日本人等と顔見知りになりコミュニケーションをとっていかなくてはならない。また、南米とくにペルーは日系人との関係も考えなくてはならないと赴任時に思った。リマ日本人学校の校長として「現地社会を大切にすること」は現地理解教育のみならず、学校の存続にも係わることだと思い、今回の派遣3年間を通し日系人社会そして日系人の方々を大切にしたい。その私の微力な協力の気持ちを察していただけたのか、私が本帰国する際には私と妻や娘共々、日系婦人会の方々が食事会を開いていただいたり、日系人協会として日系人会館において盛大な送別会を催して頂いたりした。驚いたことには、セレモニーで日系人協会会長等のスピーチを頂いたり、私のお礼のスピーチ等もあったり、記念品もいただいたり感激でいっぱいであった。こういったことを催して下さるのは初めてのことで、私はこの3年間の人間関係作りと協力姿勢は間違いはなかったなあと感じた。やはり我々、世界の日本人学校に赴く際は、まず学校や児童生徒のことを第一に考えることは勿論だし、家族や自分のことも大切だろう。しかし、我々は「現地に住まわしていただいている」といった謙虚な気持ちで、学校や児童生徒、家族のためにも大切であろう。人間は一人では生きていけないように、現地の先輩である方々の支援、協力が得られるよう、現地社会に貢献・協力する気持ちと日本人としての礼節と誇りを持って接して行かなくてはならないと痛感した3年間であった。